

I はじめに

高等学校における校内研修は、その多くが定期試験期間中や長期休業中を中心として、学校評価、教科研修、学級経営、人権教育、生徒指導（カウンセリングを含む）、進路指導、授業評価等の研修のテーマを設定し、効果的な校内研修を行うために、学校内外のリソース（資源）を活用しながら実施されている。

中留氏（1994）の校内研修の定義から考えると、校内研修は、各学校において教職員の力量向上（実践力の向上）を目指すという目的と、学校の課題解決や教職員の課題解決を目指し、学校改善につなげるという2つの目的を持って行われている。その意味で、校内研修は教育活動そのものであるということができ、校内研修の在り方の如何によっては、学校が組織として力を発揮できるかどうかが決まってくるといっても過言ではない。組織としての力の発揮に関わってくることから考えると、校内研修は全教職員を対象として、計画的、組織的に行われる研修活動であることが求められ、課題を解決して学校教育目標を具体化するために、学校改善と関連する経営的視点を含んだシステムであるということもできる。

II 高等学校の校内研修のすすめ方

校内研修は上述の2つの目的を達成するために行われる教育活動である。そして、校内研修は教師の力量を向上させることと同時に、課題解決によって目指す学校像や子ども像を具体化するために不可欠な教育活動でもある。このことから考えると、校内研修を進めていくうえで必要なのは、図1に示しているように、自校の課題の明確化や教職員の研修ニーズを把握することである。

現在各高等学校では学校評価システムの活用により、自校の課題が明確化できるようになっている。この学校評価システムの分析に基づいて自校の課題を明確化し、それとあわせて教職員の研修ニーズを把握することが、効果的な校内研修を実施するうえで大切なことである。また、学校評価システムをもとにして、「その学校らしさ」（スクールアイデンティティ）を確立するための取組を行うことも必要である。

自校の課題や教職員の研修ニーズの把握後は、その結果を職員会等で示し、共通理解を図ることが大切である。そのうえで、課題克服に向けてどのような校内研修を組むのかと

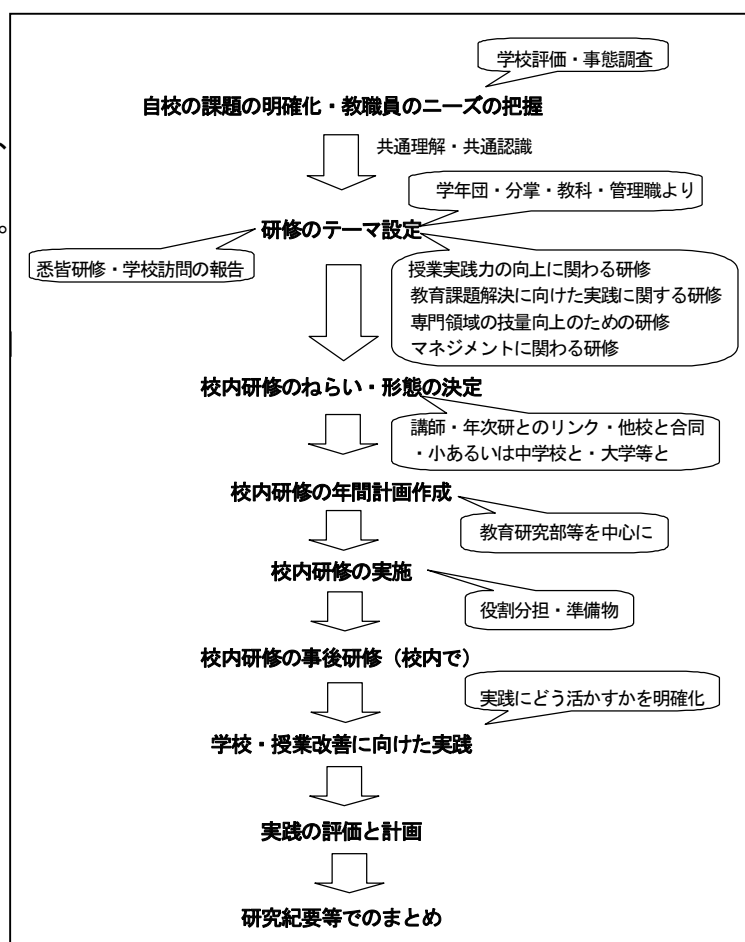


図1 校内研修の企画からまとめまでの流れ（例）

ということについて、管理職・学年団・教科・校務分掌などから、必要性の感じられる研修テーマをあげてもらい、テーマ設定を行う。研修テーマが決定できれば、次は研修のねらいとあわせてどのような内容や手法で行うのかを決定し、内部のリソースを活用した校内研修とするのか、それとも外部のリソースを活用した校内研修にするのかを決定しておく必要がある。それぞれの研修に応じて、アウトラインを描くことができれば年間計画を立てることが求められる。

校内研修中は記録をできるだけ残すようにし、レジュメや配付資料等についても研究紀要等で取組を

紹介することを考えて、1部余分にとっておくことが望ましい。研修終了後は、振り返りシートに研修での気づきや研修をとおして学んだことを各自記入できるように準備し、あわせて研修内容についての評価シートにも記入できるようにしておきたい。

校内研修は実施して終わりというものではなく、研修内容をどう実践に生かすのかという次の段階に進むことが大切である。そのためにも事後研修として、各校務分掌・教科・学年団等で実践に向けての「Plan」づくりを行うことができれば、より効果的なものとするができる。そしてその作成した「Plan」を実践（「Do」）し、評価（「See」）をすることで研修内容がどれだけ実践に生かすことができたのか、成果と課題は何なのかが明確になり、さらなる計画（「Plan」）に向けての改善（「Action」）につなげることが可能となる。研修を実践につなげてこそ、初めて研修の意義が生じる。そのためにも「研修のための研修」で留まるのではなく、「実践のための研修」を前提として、教職員がこの研修の内容は自分の実践のどのようなところで生かすことができるのか、自分はこの研修内容をどのように料理し実践につなげるのかという、イメージを描きながら校内研修に参加することが大切である。

高等学校における校内研修は、そのほとんどが定期試験中や長期休業期間中に実施されているが、課業日の放課後の時間や職員会の時間を活用しての校内研修も設定可能である。この場合は、外部講師を呼んでの研修というよりも、教職員が参加した研修の内容や資料についての紹介や学校訪問などによる報告会等、教職員の情報共有というねらいをもって行うことになる。情報を共有することは、協働文化をもつ学校づくりのベースになる部分であると考えられるからである。

表 1 研修領域と研修のテーマ（例）

研修領域	研修のテーマ
授業実践の向上に関わる研修 （授業公開を含む）	指導案の書き方について
	資料・教材の作成と有効な活用方法について
	授業評価と評価の観点について
	授業のすすめ方と授業検討会について
	多様な学習形態の有効性と活用方法について
	主体的な学習態度を育成するための指導方法について
教育課題解決に向けた実践に関する研修	開発的生徒指導と生徒との関わり方について
	豊かな心を育む教育（人権教育における人権感覚の育成）について
	在り方生き方（進路）指導について
	自己理解の促進と職業観の育成について
	特色ある学校づくりについて
	カウンセリングマインドについて
	学級経営の在り方について
	学校独自の課題について
専門領域の技量向上のための研修	専門的知識技能の修得など
マネジメント（学校・学級）に関わる研修	人間関係づくりについて
	非自己主張的コミュニケーション（アサーショントレーニング）について
	自己理解・他者理解について
	安全対策と危機管理について
	校内研修の進め方について
	開かれた学校づくりについて

高等学校における校内研修の研修領域としては、表1に表しているように、①「授業実践の向上に関わる研修」、②「教育課題解決に向けた実践に関する研修」、③「専門領域の技量向上のための研修」、④「マネジメントに関わる研修」などがえられる。また、それぞれの研修領域における具体的な研修テーマ例としては、表1に表している研修テーマなどが考えられる。

福島県教育委員会 平成16年度経験者研修Ⅱ 研修の手引〔県立高等学校用〕をもとに作成

Ⅲ スクールアイデンティティの確立による学校改善

1 スクールアイデンティティとは何か

スクールアイデンティティとは、「〇〇高校らしい、らしくない」「〇〇高校の生徒らしい、らしくない」といったような、ある特定の学校のことを考えるうえで、その学校を明確にイメージできる、言い換えれば他の学校と区別することができる、明確な規準となるイメージのことを意味していて、確立された「その学校らしさ」のことである。そしてそれは、学校のシステム全体のなかで、有形無形を問わず、具現化されている「その学校の個性」であるということができる。

「スクールアイデンティティ」＝「その学校らしさ」であり「その学校の個性」

「その学校らしさ」は、学校の場合、保護者や地域の人々など外側からのイメージで創られる場合と、内側に存在する生徒の実態や学校経営の姿から創られる場合がある。そして、「その学校らしさ」は、マイナスイメージとプラスイメージによって確立されるものである。「その学校らしさ」はスクールアイデンティティと呼ばれ、誰もが共通に持っているイメージにより形作られるため、どちらかのイメージがより強くなる。

2 何のためにスクールアイデンティティを確立するのか

スクールアイデンティティは、その多くが建学の理念や学校経営の方針に基づいて導き出されたものであり、時代の流れの中で大切にされてきたものだということができる。しかしながら、教職員が短いサイクルで異動する今日では、自校のスクールアイデンティティとは何かと聞かれたとき、答えられる教職員がどれだけいるだろう。また、自校の建学の理念や校章の意味、校訓や効果の意味をどれだけ理解できているのだろう。これらのものは、スクールアイデンティティを形成する重要な要素であり、生徒だけではなく教職員も理解しておく必要があるものである。

教科や校務分掌で職員室が分かれ、より専門化してくる高等学校においては、一人一人がそれぞれの力量だけで実践を行っても十分な成果をあげることはできず、あげたとしてもその成果や手法は共有化されることも少ない。スクールアイデンティティは、学校経営理念を具現化し、建学の精神や経営の理念から導き出されたものであり、教育内容や教師の価値観、教育目標や校則、生徒の活動などすべてに内包されているものである。

時代の変遷とともに、人々の価値観や教育への考え方は大きく変化し、建学以来の理念が現代社会のなかではそぐわなくなっている場合もある。魅力ある学校を創っていくためには、「不易と流行」の両面が必要である。自校の建学の理念という「不易」の部分の基底としながら、自校の強みは活用する一方で、現代社会とはそぐわない考え方を改善・修正し、「流行」としての新しい価値観を取り入れる。そして、未来に向かっての新しいビジョンを確立し、新しいミッションを創り上げていくことが大切である。そのためにも、スクールアイデンティティを確立するための話し合いや校内研修が必要であり、そのプロセスをとおして協働文化を創造するとともに、学校改善に向けての実践が展開される必要がある。

スクールアイデンティティを確立することにより期待される効果としては、以下の4点が考えられる。

- ① 学校経営方針に反映させやすく、理想とする学校のイメージを持ちやすい。
- ② 目指す学校像に向けて、教職員間の概念を確立しやすく、協働文化も育みやすい。
- ③ 教職員、生徒共通の意識を持たせることで、自校への愛着（愛校心）、誇りや自信などの精神的な価値の形成が可能である。
- ④ 外部に向けての学校イメージが定着しやすいなどをあげることができる。

自校をより良いものにするためには、個々の教職員が仲間意識をもち、同じ職場に勤める同僚として互いを尊重する体制づくりが必要である。学校の中に協働文化を創り上げ、お互いが情報を交換しつつ、より高めあうための建設的な批判を行う同僚性を構築することが必要である。協働文化を創り上げ同僚性を構築するために、自校の経営理念が教職員の共通のものとして理解され、目指すべき方向に組織として進むことができる学校風土が必要である。

3 事例紹介

ここでは、「特色ある取組」のなかでスクールアイデンティティを確立している3校の事例を紹介する。最初に、外的要因と生徒の変化を感じた教員たちが中心となり、「ドリカムプラン」という進路学習を提案し、ボトムアップによってスクールアイデンティティを確立した福岡県立城南高等学校の事例を紹介する。次に職員室での教職員の声の吸い上げ、学校教育目標と校訓を基底とした学校づくりをめざした総合的な学習の時間の取組により、スクールアイデンティティを確立している福岡県立筑紫丘高等学校の事例を紹介する。そして最後に、学校長のリーダーシップのもと、ミドル層を中心とした学校経営や協同作業をとおして、教職員のスクールアイデンティティを高めている広島県立神辺旭高等学校の事例を紹介する。

ア 福岡県立城南高等学校

福岡県立城南高等学校（以下城南高校）は、総合的な学習を「ドリカムプラン」と名づけて、「進路」をテーマとした取組を進めることで、城南高校としてのスクールアイデンティティを確立している。城南高校のスクールアイデンティティを目に見える形として確立したのは、「ドリカムプラン」に向けての取組のプロセスにある。

「ドリカムプラン」の取組は、同じ校区内にある私立学校の男女共学化や、入学してきた生徒たちがこれまでの生徒たちと、学力や生活態度など様々な面で異なっていることを、1年学年団の教職員が感じ、このままではいけないと考えた、数人の教師たちの動きから始まっている。

1年学年団は、この憂慮すべき状態を「黒船の来航」と呼び、先進的取組を行っている県外への学校訪問や、校区内にある2つの中学校の授業参観をとおして、城南高校はいかなる学校なのか、どうあるべきか、どのような生徒たちを育てたいのかといった目指す学校像、生徒像の確認がなされる。

このような中、夏季休業中に学校長が正副主任主事研修会を呼びかけ、担当者が泊り込みで現状について各自の感じていることや思いや考えなどを出し合い、城南高校の在り方について胸襟を開いて話し合う機会が設けられる。この話し合いの中身は全教職員に伝えられ、「黒船の来航」と1年団が名づけた危機感は全教職員に共有されるようになる。

そして、学校長の「城南高校は『ドリカムプランで行く』」との学校経営方針により、観念的な志望動機から具体的な志望動機、大学進学が目的ではなく10年後・20年後を視野に入れた「進路」をテーマとした総合的な学習の時間がスタートした。「ドリカムプラン」は、進路部を中心として開始されたが、現在では進路企画会議を中心に運営されている。この会議には、教務主任・進路指導主事・各学年主任・総合担当者や、企画広報部からメンバーが入っている。平成16年度からは第1・2学年の総学（総合的な学習の時間）担当も加え、「ニュードリカム」の構築を推進し、学校長の学校経営に関する話を受けて、会議の参加者が自分の意見を出す場として設定されている。

この会議は、自分が学校経営に参画しているという意識が持てる場となっておりと同時に、このメンバーが各学年のパイロットとしての役割を果たし、スクールアイデンティティの形成に役立っている。また、城南高校では、新任者に対して着任者研修を実施し、教頭、各部の主任・主事、学年



主任などが城南高校の取組と現状について説明をしている。この着任者研修は、城南高校のスクールアイデンティティの理解に加えて、新任者がそれぞれの「味」を城南高校の取組に反映させてもらいたいというねらいがあり、新しい「味」が加わることで、さらなる進化をめざして取組が進められている。

イ 福岡県立筑紫丘高等学校



福岡県立筑紫丘高等学校（以下筑紫丘高校）は、学校教育目標として「21 世紀の日本をリードし、世界に貢献する剛健かつ叡智と創造力に富んだ人材を育成する」を掲げている。そして校訓として、学校教育目標を明確化する「剛健・叡智・創造」をあげている。

筑紫丘高校の教職員には、進学校としてのスクールアイデンティティがこれまでも備わっていた。そのような中で、平成 15 年度から高等学校で始まった総合的な学習の時間を、「進路」をテーマとして組み立てようとする教職員の取組から、新たなスクールアイデンティティが確立されていく。そして、筑紫丘高校の新たなスクールアイデンティティの中心となっていくのが「プロジェクト P C」（P はパイオニア・C はクリエイティブ）と呼ばれる、「進路」をテーマとした総合的な学習の時間である。

筑紫丘高校では、この「プロジェクト P C」を導入するにあたって、生徒たちの変化を感じていた教職員たちの職員室における会話や、試験問題の問の意味を十分読みこなせていない生徒の現状があるといったような声を職員会で紹介するなど、生徒の実態の改善を進めていく上でのカンフル剤を打ち込んでいる。そのうえで、自校の学校教育目標や校訓などの根幹部分を再認識しながら、改善プランとしての「プロジェクト P C」を提案している。この取組を立ち上げるにあたって、1 年学年団の教職員は、生徒たちに対して実態把握調査を実施し、その調査結果を分析することにより、そこから導き出された分析結果を校内研修の場で、教職員に報告を行っている。そこでは読む力の弱さが浮き彫りになっていることを説明し、「プロジェクト P C」における課題研究と連動させるために「輪読」を導入する。「輪読」は、それぞれのテーマ分野ごとに担当教員がついているが、担当教員同士がテーマ分野についての情報交換、生徒の状況や生徒に合うと思われる図書などの情報交換を頻繁に行い、主体的に工夫をしている。情報交換の中では、「輪読」の大変さだけではなく、課題研究への手ごたえが 1 年団の教職員から他学年団の教職員に伝えられ、取組への共通理解や効果についての情報が広がっている。

職員室における教職員の日常的な情報交換の存在から、横のつながりを確立している筑紫丘高校では、平成 15 年度から総合的な学習の時間のプロジェクトチームがつくられ、このチームを中心として「プロジェクト P C」が進められている。

プロジェクトチームでは、1 年団の教職員に対して、「プロジェクト P C」を実践してのアンケートを実施し、アンケート結果を分析して生徒たちの変容を感じ取らせるだけでなく、実践を行った教職員間で共通する感想を持っていることを確認できるようにしている。そうすることで、教職員間の共通理解を進めるとともに、実践した教職員にも自分たちがやっていることに対して、確認ができる状況をつくり出している。

筑紫丘高校では、平成 16 年度もスクールアイデンティティの具体となっている「プロジェクト P C」の推進にあたり、教職員の声を吸い上げることから始めている。そして、現状改善に向けたストラテジーを思考し、ポイントを置くべきところを絞り、それを教職員間で確認して実践を進めている。

ウ 広島県立神辺旭高等学校

広島県立神辺旭高等学校（以下神辺旭高校）は、学校長のリーダーシップのもと、学校経営計画におけるミッションとビジョンを明確にした実践を行っている。このミッションとビジョンは以下のようになっている。

ミッション（使命）	冠たる「行きたい学校」、「行かせたい学校」 ～積極的生徒指導が育む自律の精神によって生まれる魅力ある学校～
-----------	--

ビジョン（将来像）
（１）伝統校に迫る進学校 ―確かな学力と進路の実現―
（２）鮮明な特色を有した魅力ある学校 ―豊かな心をはぐくむ広島宣言の具現―
（３）体育科の充実・発展 ―東の「神辺旭」、西の「広島皆実」―
（４）地域に信頼される学校 ―開かれた学校とアカウンタビリティ

このミッションとビジョンは学校長が示したものであるが、このミッションとビジョンを神辺旭高校の学校経営の方針とするため、学校長から各校務分掌と教科の主任に青写真としておろされ、ミッションとビジョンに対しての意見が求められている。各主任は分掌や教科メンバーにもこの青写真に対しての意見を求め、各校務分掌と教科から意見とあわせて達成目標が学校長に提出されている。このことは、教職員の間で、自分たちも学校経営に参画しているという意識につながり、教職員のスクールアイデンティティの形成に役立っている。



また、ミッションとビジョンを具体化するために、神辺旭高校では目指す生徒像を明確化し、その実現を目指して策定される教育基本方針のなかで、具体的な教育目標・重点目標が示されている。そして、学校生活を送るうえで、最低限生徒たちに身につけさせたいものとして「時間の厳守」「挨拶の励行」「清掃美化の徹底」を重点行動目標としてあげ、教職員も生徒と一緒に実践している。

生徒たちのスクールアイデンティティを形成するためには、まず教職員がスクールアイデンティティを確立しておく必要があり、そのためには、自分の学校を知る必要があるということから、神辺旭高校では様々な取組が行われている。一例を挙げると、全職員による校歌練習と入学式での斉唱、教職員美化活動、校内一斉清掃作業、ローカの白壁塗りなどがある。

校歌に関しては、年度当初に新任者が前任者と一緒になって校歌練習を行い、入学式の時には教職員全員が壇上に上がり、新入生を前に校歌を歌うというものである。校歌にはその学校の建学の精神や理念が込められていて、それを歌うということにより、自校の果たすべき役割を確認することにつながる。また校歌は、毎週月曜日に実施される生徒朝礼で生徒たちと一緒に歌われ、クラブ活動を始める際には壮行歌が生徒たちによって歌われるなど、歌をとおしてスクールアイデンティティが確認できている。

教職員美化活動は定期試験中に実施され、教職員が全員で校内の全てのローカにワックスがけを行い、校内一斉清掃作業では、PTAの力も借りて清掃や草刈りに汗を流している。ローカの白壁塗りは4年に1回オリンピックが開催される年に実施され、生徒と教職員が放課後にローカの白壁を塗る協同作業として行われている。また学校行事を行う際は、その行事を行う目的を生徒たちに示し周知徹底しているため、生徒たちはなぜこの行事が設定されているのか、どのような目的を持っているのかということが理解でき、行事をとおして学校の方針を確認することができるように配

慮がなされている。

神辺旭高校では、教職員の自分たちも学校経営に参画しているのだという意識と、校歌や清掃作業をつうじての愛校心の確立につながる意識を背景として、スクールアイデンティティが教職員のなかに確立されている。同時に生徒たちにも、教職員の姿や学校行事等をとおして学校の目指す方向が理解され、学校を大切にしようという意識が芽生えている。そのためか、兄弟姉妹が神辺旭高校の卒業生であるという例も多く、神辺旭高校のスクールアイデンティティが学校内だけではなく、家庭や地域のなかにも定着していると考えられる。

Ⅳ 授業改善を目指した校内研修

1 何のために授業改善を行うのか

授業改善の目的は、生徒たちがより「わかる」・「身につく」授業を提供するためであり、教師の専門性、力量を高めるという2つの目的がある。

現在県内の高等学校では授業評価システムが導入され、定期的に授業評価が行われている。また職業能力育成型人事評価制度により、自分の授業を管理職に見てもらいアドバイスを受けるということも、一部の学校では行われており、専門性や力量を高める機会は今まで以上に増えてきている。しかしながら、これらは個人としての授業改善で終わってしまい、現段階では組織としての授業改善にはつながっていない。

これまでの授業改善は、生徒たちがより「わかる」・「身につく」授業を提供するという目的とあわせて、教師が個人としての専門性や力量を高めるためのものであり、広がったとしても同じ教科内で留まっている。これからの授業改善においては、教師が個人としての専門性や力量を高めるだけではなく、学校全体の力量が高まるよう他教科にも授業を開き、授業内容だけではなく授業方法という視点から授業改善を進めていくことが必要である。そうすることで、授業の工夫点が個人のものではなく、学校のものとして広がるとともに、教員間で授業方法について互いに情報を共有する機会も増える。

このように考えると、授業改善は授業の質を向上させるだけではなく、授業を改善するために授業を開くことで、教員間の横のネットワークが広がり情報の共有化も進むことから、協働文化の育成を視野に入れた、学校改善につながるものであるということができる。

2 事例紹介

ここでは、授業が成立しない状況を打開するために、改善の必要性を感じた数人の教師たちが立ち上げた「授業を模索する会」を中心として授業公開を行い、学校改善につなげている神奈川県立柿生西高等学校の事例を最初に紹介する。次に、学校教育目標の具体化を目指す授業改善をテーマとした研究授業（神辺旭高校ではこの表現を使っている）を校内研修会の一環として、指導案の作成から授業参観の仕方、効果的な検討会の持ち方など、マニュアルを作成しそれに基づいての実践を行っている広島県立神辺旭高等学校の事例を紹介する。

ア 神奈川県立柿生西高等学校

神奈川県立柿生西高等学校（以下、柿生西高校）は、神奈川県立柿生高等学校との統合再編により、H16年4月から校名を神奈川県立麻生総合高等学校と改称、総合学科として新たなスタートをしている。ここでは、柿生西高校が昨年まで取り組んでいた、「授業を模索する会」を中心とした授業公開と授業検討会の取組について紹介する。

柿生西高校で「授業を模索する会」を中心とした取組が進め



られた背景には、小・中学校での学習が十分身についていない生徒や、授業中に教室に入れない生徒も多く、携帯電話も頻繁に鳴るなど、生徒たちが授業に参加しようという意欲が見られない状況があった。このような状況のなかで、「何とか授業が成立する状況を作ろう」「まず、授業を変えよう」と、ある研究熱心な教師が提案し、2001年から有志を募って、授業改善を目的とする「新しい授業を模索する会」が5名で結成された。「新しい授業を模索する会」は、教務部のカリキュラム検討委員会の下部組織として位置付けられ、2年目の2002年からは「授業を模索する会」（以下「模索する会」と名称を変更して、授業改善を目的とした取組を行っている。

授業公開を行うにあたり、「模索する会」から授業を公開してくれる教師を募り、授業者が決定すると日程等について、「模索する会」が全教職員にお知らせを出している（資料1・2参照）。

資料1 授業公開者の募集チラシ

「授業を模索する会」からのお願い

公開授業をしていただける方を募集します

「公開授業」というと、「敷居が高い」「見せるほどのものはない」などと思うかもしれませんが、決してそんなことはありません。誰もが授業で悩んでいます。それと同時に、誰もが他の人ない工夫をしたり、他の人から見てすぐれた点があったりします。

特別な準備をする必要はありません。ふだんの授業をそのまま見せるというスタンスで取り組んでいます。ぜひ、多くの方に公開授業をしていただきたいと思います。

これまで公開授業をした方の声



模索する会としては、今後このような予定で考えています。

9月第3週頃に公開授業（2人程度）と授業研究会

10月10日 長谷部さんによる公開授業・授業研究会（長谷部さんの6年次研修と兼ねる。）

11月後半 公開授業（2人程度）と授業研究会

1月10日 佐藤学さん来校。公開授業（2人程度）と授業研究会

2月中 公開授業（2人程度）と授業研究会

このうち、10月以外の公開授業を募集します。やってもよい、という方は、気軽に「模索する会」のメンバーに声をかけてください。時期指定でもけっこうですし、「いつでもよい」という形でかまいません。1月の公開授業は、佐藤学さんに見てもらえるという大特典付きです！

資料2 授業公開・研究会の連絡のチラシ

授業公開・授業研究会のお知らせ

授業を模索する会

今年度第1回の授業公開・授業研究会を以下の日程・内容で行います。忙しい中ですが、ふるってご参加ください。

日程：

授業公開：5月29日（水）1校時 3年1,2,3組女子体育 熊谷先生

場所：テニスコート（雨天時体育館下ピロティ）

授業研究会：5月30日（木）放課後

授業公開にあたって、担当の熊谷先生から以下のコメント（見ていただきたいポイント）をうかがっています。

- 3年生の1校時体育の出席者の少ない授業の実態（定員11人のうち、いつも来るのは9人前後）
- ペアをつくり、それぞれのペアや自分の課題を設定し、どのようにその課題に取り組むかが当面の授業のポイントです。
- 各自の体育日誌を見てもらえば、自分の課題や、ペアへの気づかいの文章が読み取れるようになっています。スポーツは一人より二人でやるほうが楽しくて、楽しさも技術が向上することでその質も向上していくこと、互いが協力すること、勝てなくても喜びは大きいことが分かってもらえたらと思います。まずは楽しいことが一番！！

ぜひ、多くの方のご参加をお願いします。また授業をビデオ撮りますので、公開授業を御覧になれなかった方も、授業研究会への参加は可能ですので、どしどしご参加ください。

またそのお知らせの中で、授業者が授業の中で見てもらいたいポイントも示されている。2001年度は、座学の授業の公開が多かったが、2002年度は、教室を離れて行う実技系の授業公開も行われた。授業公開を行った教科科目は、体育・音楽・数学・英語・物理・世界史などで、取組は確実に広がっている。

授業公開では、教室の前方から授業中の生徒の様子がVTRで撮影され、後で開催される授業検討会で活用している。授業検討会では、VTRの画面をとおして生徒の授業中の姿勢や態度、反応などを中心に、授業者が一人一人の生徒をどれだけ見ているのか、生徒のつぶやきや発言をどのようにとらえ、どのように受け容れているのかといった点を中心とした意見交換が行われている。佐藤氏(1999)は、教育哲学者のネル・ノディングの「子どもの発言の意味を受けとめる教師は多いが、発言する子どもの存在を受けとめている教師は少ない」という言葉を著書のなかで紹介しているが、ここでは、教師が一人一人の異なる個性を持った生徒たちの存在を、どれだけ受けとめているかという点を中心とした授業検討会が行われている。そのため授業検討会では、授業内容についてではなく、生徒とのかかわりや授業方法についての意見交換が進められているため、他教科の教師も意

見を言いやすくなっている。

この授業公開と授業検討会は、校内だけではなく校外にも開かれ、高等学校だけではなく中学校からの参加者もいる。また、授業検討会では、毎回ではないが東京大学教授の佐藤学氏や教育委員会の指導主事などを助言者として招き、指導や助言をもらっている。

授業検討会は、学校長の挨拶、助言者からの挨拶に続いて、授業者の授業についての感想が述べられる。その後、VTRを見ながら助言者の解説を聞き、助言者の解説が終わると、校内外からの参加者が意見や感想を述べるという流れになっている（巻末資料1参照）。

「授業を模索する会」の取組は、柿生西高校だけではなく他校にも広がり、情報交換が行われていること、それまで授業公開をしたことが無い教師からも手が上がり始め、校内でも広がりが見られるなどの成果をあげている。また、授業中の生徒の様子についての情報交換が教師間で進むようになり、教科の内容についても、どうしているのかという話題が盛んに交わされるようになっている。この取組は、教師の授業改善という目的からスタートしたが、授業を公開し教科間の壁を低くすることで、互いに生徒を見つめるきっかけとなり、教師の生徒理解につながっている。自分の授業では気づかない、あるいは見ることはできなかった生徒の様子を、それぞれの教師が知り受容することができるようになったことから、生徒たちも教室に入ることができるようになっていく。この状況を佐藤学氏は「アメイジング」と表現し、同時に「子どもたちの信頼を失っていた大人が、生徒たちに信頼されだしたのだ」と言っている。

「授業を模索する会」の反省と課題として、研究会の深まりや協議の内容があげられているが、活動報告集の「おわりに」では、「私たちは、この積み重ねに自信を持って続けていきたい。来年の地道な継続と、その成果に期待して、この項を終えたい」とある。教科を越えての公開授業と授業検討会、学べき点は多い。

ウ 広島県立神辺旭高等学校

広島県立神辺旭高等学校（以下神辺旭高校）は、毎月1回の校内研修の場を設定し、教育研究部が中心となり、学校長から提案されるテーマや各分掌・教科から出てくるテーマ調整を行っている。また教育研究部は、校内研修の司会・運営・記録などの業務なども担当している。授業公開をもとにした校内研修（神辺旭高校では研究授業と呼んでいるため、以下研究授業とする）は平成14年度からスタートし、現在3年目の取組となっている。



平成14年度の研究授業は、広島県教育委員会の指導主事を助言者として招き、学校内だけではなく学校外にも公開して実施され、最初は教科主任が研究授業を行うという形でスタートしている。平成15年度からは、複数の引用・参考文献をもとにして「研究授業の在り方・推進について」（以下「研究授業の資料」）という資料を作成し、それに基づいて研究授業を実施している。神辺旭高校では、この取組を次のように捉えている。

「教育の中立性と公開制を柱とする、開かれた学校づくりの推進、教育内容の充実、信頼される公教育の基盤づくり等に寄与するもの」で、「教員の指導力の向上に有効な手立て」



そして、上述のような捉え方に基づいて、「授業改善を目的とした校内研修」の定着・充実の必要性を説き、「学習指導要領に基づく評価規準を作成」すること、「研究主題等の達成状況を十分に検証し、授業改善に結びつくような研究授業・公開授業」の実施に向けて取り組んでいる。

神辺旭高校では、研究主題の立案に際して大きな拠り所としているのが学校教育目標である。学校教育目標のめざす生徒像、学校像（＝スクールアイデンティティ）の具体化を目指すプロセスをとおして各教科で研究主題を設定し、研究主題だけでは研究の具体的な内容や方向性が見えにくいことから、研究主題の設定と同時にサブテーマを設定している。そして研究主題は、各教科が1年間取り組んでいく主題となり、サブテーマは各教科が設定した研究主題に対する個人の研究テーマとなる。神辺旭高校では、学校教育目標を具体化するための研究主題を立案する手順について、表2の「研究授業の資料」で以下のように紹介されている。

表2 「学校教育目標」から「研究主題」立案への手順

学校教育目標
冠たる「行きたい学校」、「行かせたい学校」
めざす生徒像、学校像
確かな学力と進路の実現、豊かな心、競技力の向上、信頼される学校
これらを踏まえ、各教科で教科の年間指導計画およびシラバスを基にして研究主題を設定してください。研究主題はその教科の今年一年間の研究主題となります。サブテーマは、各教科の年間研究主題に対する個人研究テーマとなります。 〈例〉 研究主題とサブテーマ 主体的に考える力を育てる数学の授業を求めて ～数学的活動を活かす指導方法の工夫～

「研究授業の資料」の中では、研究主題の例として①「課題解決思考的テーマ（ここが問題だから改善したい）」、②「目標思考的テーマ（こういう生徒を育てたい）」、③「開発的テーマ（新しい指導方法等を研究したい）」などがあげられ、研究の方向性が明確になるようにとの配慮がなされている。また、評価項目として研究内容・検証の指標・達成目標が、あらかじめ設定しておく必要があることとあわせてその例が紹介されている。例としてあげられているものは、以下のような評価項目である。

- ・「習熟度に応じた繰り返しの問題演習により、共通学力テストの観点別評価において『表現・処理』の平均通過率を5%上げる」
- ・「自力解決の時間の確保により、自分の考えを持つことができる生徒の割合を10%増やす」
- ・「数学的活動を積極的に導入し、共通学力テストの観点別評価において『数学的な見方や考え方』の平均通過率を10%上げる」

さらに、検証の指標の設定にあたっての留意点の明示とあわせて、研究内容・検証の指標・達成目標の具体例が紹介されている（巻末資料2参照）。

「研究授業の資料」では、研究授業に向けた学習指導案を「授業者自身の計画案であると同時に、参観者に対してその授業提案のねらいが明確に伝わり、後の研究協議に生かされる」ものととらえ、そのためにも工夫の必要があると述べている。そして学習指導案作成のポイントとして、以下の3点の留意点が示されている。

- ① 生徒の状況を分析する。
- ② 生徒の状況を踏まえ、目標と評価を示す。

③ 研究主題に照らし、授業における工夫改善の視点を明確にする。

また、研究授業で使用するための学習指導案の式についても、使用ソフト・フォント・文字数・行数・マージンなどが細かく定められ、指導案の形式が紹介されている（巻末資料3参照）。学習指導案の作成においては、授業者が作成したものをたたき台として教科内で検討し、できたものを指導助言者（ここでは指導主事）に提示し意見をもらったうえで、教科内で再度検討を行う。完成した学習指導案は教育研究部に提出され、全教科の学習指導案集としてまとめられている。

研究授業後は研究協議会が開かれているが、研究協議会を効果的な会とするために、「研究協議会を充実させる6つのポイント」を示した資料が用意されている（巻末資料4参照）。ここではポイントとして、以下の6点が上げられている。

- ①「『協議の視点』の明確化」
- ②「授業者からの振り返り」
- ③「客観的な情報の必要性」
- ④「協議会への主体的、積極的な参加の必要性」
- ⑤「司会者の役割の重要性」
- ⑥「改善計画の明確化」

研究協議会の内容は「研究協議のまとめ」に記録され、研究授業の翌日の12時までに教育研究部へ提出される。そして、教育研究部に提出された学習指導案と「研究協議のまとめ」は、研究紀要の中に納められ、授業改善に向けた実践の記録となっている。

研究授業と研究協議会は、きめ細やかな資料に基づき計画的に実施されている。また、指導案の検討においても外のリソースを活用すると共に、自分たちで作り上げていくという共同作業のプロセスが見られる。研究授業は他教科の先生方や学校外にも開かれている。そのため、研究授業は様々な角度から観てもらっているため、研究協議会も充実したものになっている。なによりも、多くの先生方が授業を計画的に開き、研究協議会を行っている点は見習う必要がある。

V おわりに

校内研修の成否は、多分に当該校の経営方針に依存している。推進体制がきちんと出来ているのか、計画的・組織的に行われているのか、自校の目指すべき方向性が明確になっているのか、教職員のモラルは高いかなどの要因が、校内研修の成否につながるからである。また、校内研修の推進にあたっては、教職員の協力が必要であり、研修をとおして協働関係を構築し学校改善につなげていく環境づくりも非常に重要である。

しかしながら、校内研修を進めていく上での阻害要因として、「多忙感」に関連した否定的な意見や、「研修時間の不足」「解決すべき課題の多さ」「指導者の不足」「モラルの低さ」等様々なものがあげられる。また、校内研修が学校内に留まり、研修を客観的に評価し継続的に行うといった視点が欠如しやすいという問題性もある。校内研修は学校内における研修＝教師教育（OJT）の中核となるものであるが、これをやっているから研修は十分であるという偏狭な考え方で満足するのではなく、校外における研修＝教師教育（OFFJT）により、自らの教師としての力量を向上させることも必要である。そして何より大切なことは、校外の研修での学び（情報）を自分だけのものにするのではなく、学び（情報）を他の教職員と共有する機会を設けることである。学び（情報）の共有は、自分だけではなく他の教職員の財産ともなり、それをもとにした会話が広がることにより協働文化が構築されていくからである。学び（情報）の共有の機会とは、職朝や職員会議の時に時間を取って行うことができ、正式な校内研修として実施しなくても共有化は可能である。学校現場は今、多忙を極めている。多忙であればこそ、時間

の有効活用が必要である。

校内研修は、自校の学校教育目標の具体化により、生徒たちの成長発達を促進するために組織的・計画的に取り組まれるものであり、教師の力量向上と協働文化の育成を目指し、学校改善に結びつく研修活動である。そのことに留意して、各学校で効果的な校内研修を実施してほしい。

参考文献：

中留武昭編著 「シリーズ『学校改善とスクールリーダー』－学校改善を促すスクールリーダー 8 学校改善を促す校内研修」 1994 東洋館出版社

<http://www.sisj.net/~main/page/si.html> スクールアイデンティティ導入の提案

中留武昭・田村知子著 「カリキュラムマネジメントが学校を変える」 2004 学事出版

安達忠彦・新井年男・飯長喜一郎他編 「新版 現代学校教育事典」 2002 ぎょうせい

神奈川県立柿生西高校「授業を模索する会」編

「授業と学習の転換を目指して」 活動報告集 Vol.2 2002

佐藤学 「教育改革をデザインする」 1999 岩波書店

中留武昭編著 「校内研修を創る」 1984 エイデル研究所

岸本浩次郎・久富喜行編著 「教師の力量形成」 1986 ぎょうせい

福島県教育委員会 平成 16 年度経験者研修Ⅱ 研修の手引〔県立高等学校用〕

協力校：

福岡県立城南高等学校・福岡県立筑紫丘高等学校

広島県立神辺旭高等学校

神奈川県立柿生西高等学校（現：神奈川県立麻生総合高等学校）

巻末資料 1 授業検討会

ここで紹介している資料は、神奈川県立柿生西高校「授業を模索する会」作成の「授業と学習の転換を目指して」活動報告集V o . 1 . 2 (2002 年度)より抜粋しています。

●ビデオを見ながらの佐藤先生の解説

佐藤:あの男の子達、しゃべってても聞いているんだよね。一方、黙って聞いているけど、こっちの子は全然分かってない。

鈴木:(授業の展開が変わり、途中の例 2 を抜かして、問題演習に行ったことに對して)どうして展開を変更したんですか？

大野:生徒にとって分かりやすいと思ったからです。

鈴木:生徒の様子を見てということですね。

佐藤:この授業の一つの特徴は、時間を追って生徒の集中度が上がっていることだよ。普通は落ちるんだけど。それが、何なのかっていうことが、一つの見えるポイントかな。どの子を取り上げても、殆どそうだよ。(画面の一人の子に注目して)この子の反応がとても面白いんだよ。最初、背を向けていたのが、途中で√のときに、にこって笑ってね。あれは、出来るぞっていう感じなんだよね。ところが、実際に計算が始まると、ぶつぶつ分らないって言ってるの。それでちょうどいいときに、大野先生が来たんだよ。最初は、この子の方から先生を呼びとめるなんていうイメージは沸かなかったです。大変な子だなあという感じだったから。(生徒が大野先生に次々と個別に教わっていることに)いい光景ですね。大人が信じられているっていう気がするんですよね。これが今の高校生には殆ど無いんですよ。これが出来ているということが、とても大切なことです。普通は、何で(授業を見に)来たんだというような目がありますが、その眼差しが無い。ここまで来るのが大変なんですね。高校生の場合、こういうつながり方が出来るのがまず大前提だと思います。

(しばらくビデオを飛ばして)

佐藤:(生徒の取り組みが)どんどん良くなってくるでしょ。面白い。いろんな秘密がここにあるんだよ。みんないい顔をしていますよ。よく考えている。

●外部の方からの感想など

関口:柿生西の授業を見慣れていない方に、この今の授業の中で、何が一番問題だと考えるのかを伺いたいと思いますが。感想で構いません。

宮地:元中学の教師です。中学の教師から見ると、授業者のお二人とも早口だなと思いました。立ち歩く子もいましたが、(スタートから)もっと授業に集中をしたいですよね。スタートの時に、きちんと子供たちと通じ合うような授業をしたいという思いがあります。先ほど、佐藤先生から、だんだん授業の集中度が上がって行くというお話がありました。出来ればスタートの時に、集中させることがもっと高いレベルの授業には必要なのではないかと思います。従って、導入時の発問で、授業のねらいをしっかりと生徒と共有できているかどうかということです。平方メートルの質問から始まりましたが、あれがどういう狙いがあったのか、その辺に興味を持ちました。

松井:まず授業を公開されるということは、とても大切なことで、それを高校でやられているというのは、希有なことだと思います。昔、J学園で教えていて、大変な子供たちに関わったことがありますが、今日は質の違う大変さを感じました。小中学校で完全に子供たちを破壊し尽くして、子供たちを高校に送っている実態を見たように思いました。私の記録では(授業が始まって)6 分したら、生徒達が落ち着いたんですね。それまではかなりざわついて、授業になるのかなあと思って見ていました。学校で教えないと行けないことは、学問と集団のルールではないのかと、授業のルールも教えないと行けないのではないかと思います。みんなの意見を聞いたりするときには、ルールに従っていくことが必要なのでは。内容についてすぐに感じたのは、九九が身に付いていないなあということです。九九が使えるんだなあということに気が付いていない。過去の学習が使えるんだということも、ぜひ高校の先生に教えて頂きたいと思

います。

大野:早口は本人も自覚しているんですが、生徒にもよく言われるんですけど、なかなかゆっくりしゃべることが出来ません。(お二人の指摘に関しては)授業に対する考え方の違いがあると思うんですが、私は最初ざわざわと始めましたよね。最初、起立、礼という風に始める人もいまして、もっと違った方法を使う方もいるでしょうが、私がいまいちそういうことが好きではないということもあって、個々との対応の中で、だんだん集中していけばいいと思っています。そういうところが、見ている方からするとはがゆいと思われるのかもしれませんが、私はそういうスタイルでやっているの、まあ、仕方の無い感想だと思います。

加瀬:同じ数学科です。同じ教科の授業を見る機会はなかなか無いんですが、今ビデオを見て、大野さんの人柄がすごく出た授業だと思いました。出だしの部分で騒がしいというのは、うちの生徒の特徴で、去年、柿西に最初に来た時に、出だしはいつもああいう感じで、うるさくてどういう風に授業をやるのか悩みました。結局は、生徒と話をしながら、その時の雰囲気で、生徒の様子を見ながら、盛り上げられるものであれば、盛り上げていくという風にやっていました。決まったように起立礼とかをしても、なかなか上手くいかないと思います。すごく上手く行っている、いい授業だったという風に感じました。

宮地:先ほどの発言は、起立礼が必要であるということではありません。どういう風に切り込むかということを考えて、導入時の発言で、今日の狙いを提示してはどうかということで、発言しました。

加瀬:大野さんの授業はやはりトータルとして見た方がいいと思います。細かいところはいろいろとあるかもしれないけど、トータルとしては、だんだん盛り上がっていくし、ああいう風に授業が出来れば、自分だったらすごいなあと思うと思います。

熊谷:ギャラリーが多いので、生徒はやはり興奮しているのかなと思いました。途中でアクシデント(コートにジュースがかかってしまう。それを拭こうとする)が起こりますよね。でも、アクシデントが広がりませんでした。時には、クラス中に広がってしまうことがあるけど、それが無いということは、生徒が集中していたということでしょうね。あと、九九に躓いているんだなあということを感じました。ひとつ気になったのは、先生がルートをつけるのと、つけないのがあるんだとおっしゃったんだけど、ルートをつけなきゃいけないのとそうでないのと分からない子がいるだろうなあと思いました。生徒はとても穏やかな感じで、先生は早口だとおっしゃいましたが、私としては適切なテンポで、生徒にとっては心地良いのだと思いました。それに、一人一人のところに目に行くという個人に対する配慮が、とてもいいなあと思いました。

関口:だんだん盛り上がっていった理由の一つは、生徒がぼそぼそ言ったことを、大野さんが取り上げて、板書でそれを拡大していたこと(何も言えない子もいるのを)で、それが、集中力を高めた理由かなあと思います。O 君は、ジュースをこぼしたり、いろいろしていましたが、授業を盛り上げていることもしていました。他のクラスでも、うるさくして授業を壊す子は、盛り上げる係りをやる場合もあります。担当者がよく分かっていたら、切り替えさせてやれるのではないかと思います。13 人の小集団でしたが、まだしゃべっていない子がいて、つぶやいて質問がある子がいたようでした。次の時間に、その辺を解決していってくればと思います。やはり、つぶやく子の声を聞くには、小人数のクラスの方がいいですね。

片岡:最初背を向けていた女生徒は、普段はああいう感じには無いんですよね。ジュースをこぼしていた、授業を作ったり壊したりしていたという O 君は、普段もああいう感じなんですけど、でもやっぱりちよつと様子が違うと思います。こういう研究授業をするときは、あんなに人がいる中で、普通通りには行かずが無い、その雰囲気の違いを頭に入れないといけないと思います。基本的に4組は、勉強をおとなしくやるのが4月当初の姿で、それが2学期になるにしたがって、ややざわついてきたなあというのが、授業担当者の印象です。

●だんだん集中することについて

吉川:私は国語なんですが、うちの生徒たちは、知っていることは得意げに取組むけど、知らないことに對する拒絶反応というか、そういうのがあるように思います。たとえば古文なんかやらせるとお手上げで、取組まないというところがあります。だけど、知ってる漢字のプリントなんかやると、喜んでやる。そういうところと似ているところがあるのかなあと思いました。つまり、はじめに「何々をやる」と大上段にふりかざすのではなく、今日のように生徒が分かっているところから少しずつやり始めると、知らない間にだんだん

と、「出来るんだ」という気持ちになる。そうして集中していったのかなあと思いました。

若圖：数学科です。僕は生徒と、今日この時間に何をやるべきかを共有できるとは思っていないですよ。それこそ、平方メートルの読み方が分からないという段階で、そこから説明しながらピタゴラスの定理を説明して、計算の仕方が分かったという状態です。中学校で習ったとはいっても記憶にはないわけで、生徒にとっては、新たな発見のようなものになっている子が多いのだと思います。こうやればいいんだということが分かれば少し取組んでいけるのかなあ。その時間で何か出来るようになって、だんだん集中できるようになってきたということは、分かってきたという自覚を生徒が持っていたのかなあと思いました。全体的な見通しを立てて、何かこういうことをやるというのは、難しい面があるというのをいつも感じています。出来ないと思っても、なんかやってみるというところで、いつも勝負していると思います。

喜鶴：大野先生とは、以前にご一緒に授業を何度か見せていただいたことがあります、以前と変わらないなあと思いました。13 人の授業で、だいたいよくやっていたけど、ずっと伏していた子とか、顔をあげていたが、何もしていない子がいるのが気になっていました。そういう子をどうするのかなあと思いました。

富樫：一斉に話をしながら、ずっと一時間続けていくというスタイルが、私には出来ないんですよ。私が話せば話すほど、生徒はざわついてくるというか、話すとだめだ、何とか話さないで授業をもっていけないかなあといつもそういう方法を考えるというところが、僕にはあります。話すことが僕は下手なんだと思うんですが、今日やるのはこれだけだという風に絞って、ちゃんと準備しようという風にして僕はやります。それじゃないと僕は出来ないんですよ。今日、たまたま僕も三平方の定理をやったんですけど、やっぱりそういうことをやるのも、けっこう準備をしてもっているんですよ。今日の大野さんのような授業は、僕の出来ないことで、生徒がだんだんちゃんとやる方向に向かっていくというのが、本当にすごいなあと思いました。あと、九九が出来ないということについては、高校になって九九が出来ない子が入ってくるというのは、まずいことだと思っています。自分の子供の友達で、六六12とかいう子がうちに遊びに来たりするんですけど、そういう子達がたくさんいて、小中学校であまり面倒を見ないで、そのまま流しちゃっているのかなあとこの気がします。小学校、中学校の先生がいしたら、ぜひ今からでもやっていただきたいなあと思います。

●佐藤先生よりー全体的な印象ー

いくつか感じた点をお話します。まず3校時に、すべてのクラスを5分ずつ見せて頂きました。全部は回りきれませんでしたけど殆どのクラスを見せて頂きました。正直に言って、ひじょうに感動致しました。1年半前を知っていますから。ずっといらっしゃる先生方は、子供たちの変化が緩やかなので、分からないと思うんですけど、ものすごい変化ですよ。英語で言うと、アメijingという感じです。有難うございましたと先生方に感謝を申し上げたいと思います。前回来た時は、教室に入らなくて廊下にいる子がたくさんいたんですよ。それに、僕も一緒に声をかけて行くような感じで回りました。それが、今日は教室に入れない子が殆ど見あたらなかったですよ。その変化っていうのは、すごいと思います。まだ、事実ドロップアウトはかなりの数いることはいるんですが、去年の数から見ると、激減しています。僕は、大阪、神奈川、東京のいわゆるボトムラインの高校を回っていますが、みんな大変な状況で、しかも年々悪くなっています。そういう中で、先生方がこういう子供たちの姿を築いて来られたというのは、ひとえに、先生方が授業を公開し、子供の姿を見つめてきた成果ではないかと思います。これは時間がかかることです。100回授業研究をやらないと、学校は変わりませんね。3回、4回の授業研究では変わりません。誰がやっても授業は難しいし、子供の問題は複雑ですから。それを、子供たち同士の中でも、先生方同士の中でも共有しあい、関わりあうのは、手間暇かかるんです。しかし、時間をかければかけるだけ、着実に変わっていくというのが、子供と学校の姿であって、そういうところを地道に、しかも高校でやってきたこと、先ほど、高校では稀有な例だという話がありましたが、まさにそうです。それをやってこられた先生方にまずは敬服いたします。

僕が、1年半前に来たときに、まず要求したことがあったんです。その時は、壁は落ちているし、廊下から何から汚なかったんです。その前に、東京拘置所を文部省の仕事で調査したんですけど、柿生西の建物は、刑務所よりひどかったんですよ。神奈川の高校はほんと、ひどいです。彼らに心地よい空間を作って上げなくては。気持ちやすさんでいる子供たちだから、せめて学校では、学ぶときには、明

るい空気とか、気持ちよい言葉かけ、気持ちよい対人関係がやはり準備されないと駄目ですよ。そういう風に申し上げたら、校長先生や教頭先生ががんばって下さって。僕は、先生方でペンキ塗りをしようというくらいだと思っていたんですが、きれいに改装がされています。今はまだ殺風景でさびしいんですけど、カレンダーの絵でもいいからいろんな絵や、子供の作品を1点でも2点でも飾っていくような方向で行ってほしいなあと思います。まあ、それが全体的な印象です。結論から言うと、アメijing。ここまで来るのはものすごく大変ですが、ここからの変化は少しずつ早まります。

●佐藤先生よりー大野先生の授業についてー

いつも思うのは、研究授業をする目的ですけど、乱暴な言い方ですが、いい授業をするためではないということなんですね。もちろんいい授業をしたいというのは、教師の宿命と言っているんです。僕も教壇に立ちますから分かります、しかも見られるとなると、いい授業がしたい。いい授業したねと言われたいし、自分でもいい授業をしたという実感をもちたい。しかし、いい授業に拘っている間は、子供はどこかで捨てられています。なぜなら教師はいい発言をつないでいくから。そうではなくて、どの子の発言もつないでいかなければいけない。僕は、極端に言うと、教師は授業は下手でいいと思っているんです。だけど、子供は一人残らず、学びが好きになってほしい。学ぶ子供に育ててほしい。もつと端的に言うと、数学を嫌になって欲しくないんですよ。たとえ、出来なくても少しずつ取組んでいくような子供になって欲しいし、九九が出来なくても、数学って面白いよね、考えることって面白いよねって言える様な子供になって欲しいと思っています。

そういう風に考えて今日の授業を見たときに、13人だから出来たということも言えるだろうけど、逆に言うと、13人で出来なければ、30人でも出来ないから、そういう意味で申し上げますけど、僕は率直に言って、感動しました。というのは、九ごと一時間、一人ずつ見ていくといいと思うけど、どの子も何かに、あそこで出会って経験していました。本当に一人残らず。確かに、突っ伏していた子もいましたよ。僕が援助していたんですけど(佐藤先生に近い位置の生徒が、突っ伏していたのを、問題演習の時に佐藤先生が教えていた)。本当に大変ですよ。だけど、その子は、ひとつ取っ掛かりが出来ると、どんどんやるようになるんですよ。君、間違ってもいいからやってごらんよって言いました。

でも、間違えるということが、子供は怖いんですよ、嫌になっちゃうから。授業の最初から騒ぎ出す子っていないじゃないですか。子供って授業の最初はみんな期待しているんですよ、どんな出来ない子も。途中から騒ぎ出すでしょ。僕は授業研究で先生方に、子どもが騒ぎ出す前のビデオをみてもらうんですけど、教師はそうすると、その時はその子は座ってじっとして、黒板をよく見ていて問題が無いと言うんですよ。騒ぐから問題になるわけなんですよ。これは、全く教師のご都合による見方です。子供にとっては、その黙っているときが一番問題なんですよ。分からなくなってきたりしますから。教師は騒がなきゃ問題が無いとして、見てしまうもんだから、決定的なところで見落としてます。何でも一生懸命やっているときに、声をかけないのか。必ず困ってますよ、どこかでパニックになっていますよ。だから僕は、騒ぐ子は、教師の裏切り(分からない時に援助をしなかったこと)への復讐だと思っているんです。(そういう授業では)一人一人に教師が目を向けていない。一人一人に目を向けていれば、必ず子供は応える。先生は十分に目を向けたつもりかもしれないけど、十分に目を向けられたという実感が無い子、その子に取ってみれば、一言かけられることが嬉しいんですよ。どんな言葉かけでもいい。

その意味で大野先生の授業を見ると、やはり早口ですよ、対応が。子供のリアクションをもうひとつ待って、次に移るといいと思う。先生が来てくれてほっとしているその子の様子が、大野先生には、多分見えていないですよ。もう次に動いちゃっているから。もうワンテンが落ち着いた関わりが出来ればと思うんですが。にも関わらず、きちんと生徒に届いていたと思います。一人一人を支えることです。具体的に支えることです。そのためには、場合によっては何かを捨てないといけない。半分しか進まないこともありますよね。でも、それでもそれを取るということを教師としては考えていい。それによって、子どもの反応が変わってくると思います。

授業のルールについては、全く松井さんのご意見の通りだけど、僕はルールはたった一つでいいのではないかと思います。友達が意見を言う時は、ちゃんと聞こう。聞いて自分で考えようということです。あと、今日素晴らしいかったのは、「先生、分からないよ」と声がかかったでしょ。先生だけじゃなくて、友達にも声がかかっていた。分からない時に、分からないよ…で援助を求められる、これがすごいです。これ

が出来るようになると、子供たちの中で学びが広がっていく。普通は、出来ないです。分からなかったら投げ出すか、突っ伏すか。よく自立か依存かという問題で、自立ばかり言われますけど、依存でいいんです。依存できる子は自立できるんですよ。今、問題なのは、依存も自立も出来ない子なんですよ。

それからこの授業の中で、もう一歩進めるとすれば、子供たちどうしのすり合わせがあるといいんですね。よく見ると、リスクイナ子は点在しているんですね。O 君(ジュースをこぼしていた子)は、心配ないですよ。逆に、まじめそうにやっていて、考えていない子、真面目にやるということしか知らない子は、危険です。小学校 5 年からノートを取るだけになってしまっている子、真面目にノート取るだけの子は、騒いでいる子よりも恐いです。ノートだけとるのは、考えなくてすんで楽なんですよ。どの子に対しても、きちんと一人一人の教師のサービスが与えられることが大事です。細やかな支えがベースにあるべきだと思います。でも、例えば低学力とか不登校の生徒のことなどは、教師の努力だけで解決した例は僕は知りませんよ。なぜなら、教師は30 人を見ないといけないから。中学校の教師なんか、200 人を見ないといけないんだから。もしそれが、一人二人を見るんだったら、できますよ。一番大切なのは、子どもを支えるのは、子どもだということです。子供同士の学びあいとか、すり合わせとか、分からないことを、ちょっと教えてと言ったりできれば、必ず伸びます。

ドリルなんかやっても無駄です。小学校 2、3 年生の時に、きちんとやっても、今九九が出来るかという、そんなことはない。なぜなら九九は定着しないんですから。自転車に乗るのは、定着します。身体で覚えることです。いくら九九を徹底してやっても、使わずにほっておいたら、定着しないんです。昔もつとやっておけばということではなくて、今の高校の先生方が、もっと九九を使う機会を保証しなくては。学力についてもっと言うと、底辺校の学校の授業で、子供たちの学力レベルは、小学校 3 年生くらいだと言って、よく小学校時代の復習をします。でも、試験をやってみれば、どんな底辺校の子も、小学校 6 年生くらいの学力を持っています。彼等は、小学校 3 年生くらいから分からなくなっていますけど、中学、高校と学ぶことで後ろが引っ張り上げられているんです。学力は下から積みあがらないんです。ですから、易しい授業じゃ駄目なんです。妥協しないで、子どもが分からない授業をしないとイケない。今日、九九を思い出した子、沢山いましたよね。ルートを思い出した子、移項を思い出した子、いましたよね。というように、副産物で全部回収していくんです。だから、できるだけ水準を下げずに、妥協しないでやる。だけど、これは子どもにとって非常に辛いことですから、個別に支える、それしかないですね。

そういう意味で、とてもいい授業だったけど、もし今後のことを考えれば、横の学び合いが生れた方がいい。分からなかったら、友達に聞いていいんだよって。これを教え合う関係にしたら駄目です、人間関係が悪くなるから。教えあいの関係とは違って、学び合いの関係はさりげないもので、その子が求めないうちはほっとく。その子が求めたら、さっと助ける。そういう関係を育てていけると、ずいぶんダイナミックになってきます。授業で難しい課題になった時には、グループに渡しちゃえばいいですから。さあ、みんなで 5 分間考えてみて。普通、先生中心の授業だと、先生が 10 のエネルギーを使っていると、子どもは 2 くらい、ひどい子になると、一 2 くらいで寝てますよ。逆転して、子どもが 8 から 10 出して、先生は、6 から 7 でゆったり構えて。そのためには、学び合う関係、横の関係を作ればいいんです。ただし、これは教師はたいてい嫌がります、なぜならおしゃべりするから。でもここが、勝負なんですよ。僕は、基本的にはおしゃべりには、寛容であった方がいいと思います。いちいち注意したら、人間関係が悪くなってしまう。ただし、生徒がおしゃべりする時には、教師は注意深くその様子を見ないといけない。生徒が分からないときは、迷わずに援助に行く。生徒が分かりきったことをやっている時は、次の難しい課題に挑戦するように。人数は、最初二人くらいから始めるといいですよ。二人だとおしゃべりしないけど、話す内容がつまらないです。次にできるようになったら、3 人。本当は理想的には、4 人から 5 人くらいが、一番深い話し合いが出来る。というように、子どもの学び合う関係、探求し合う関係をじっくり育てていくこと、それが生れてくれば、底上げにもなるし、レベルが高くなります。

あと、場なんだけど、教卓と教壇でしょ、(小人数だから)先生、下でしゃべったほうがいいよね。13 人くらいだと、円形とか、箱型でいいですよ。先生が一つテーブルを前において、座ってやっていたらいいんじゃないかな。そういう場の問題も少し工夫していいのかなと思います。いずれにせよ、今日の授業から学ぶべき点は、一人一人がきちんと学びの経験を持っていたこと。これを積み上げていけば、信頼になってくる。基本的な信頼が教師と生徒の間に積みあがっていることが素晴らしいと思いました。

<具体例>

	研 究 内 容	検 証 の 指 標	達 成 目 標
関心・意欲・態度	・ 自力解決の時間を十分確保し、問題解決能力を付ける	・ 生徒の意識調査における「自分なりの考え」についての回答者の割合	・ 自分の考えを持つことができたと答える生徒の割合が10%以上増やす
数学的な見方や考え方	・ 数学的活動を積極的に取り入れ、数学的な見方や考え方を伸ばす	・ 生徒の意識調査における「数学的な見方や考え方」についての回答者の割合	・ 「数学的な見方や考え方」がついたと回答する生徒の割合が10%以上増やす
		・ 学力調査における観点「数学的な見方や考え方」の通過率	・ 「数学的な見方や考え方」の平均通過率を10%上げる
表現・処理	・ 習熟度に応じた繰り返しの問題演習により、問題解決の力をつける	・ 学力調査における観点「表現・処理」の通過率	・ 「表現・処理」の平均通過率を5%上げる
知識・理解	・ 自己評価カードを活用し知識の定着を図る	・ 自己評価カードに書く内容	・ 自分の理解度を学習内容等と関連付けながら自己評価できる生徒の割合割合が10%以上増やす
		・ 学力調査における観点「知識・理解」の通過率	・ 「知識・理解」の平均通過率を5%上げる

卷末資料 3
 指導案形式例

第 1 学 年 数 学 科 学 習 指 導 案

指導者 広島県教育委員会

授業者 広島県立神辺旭高等学校 教諭

指導主事

(数学科)

1 研 究 主 題

主体的に考える力を育てる数学の授業を求めて
 ～ 数学的活動を活かす指導方法の工夫 ～

2 日 時

平成 1 5 年 5 月 2 2 日(木)第 5 校時

3 対 象 生 徒

2 年 2, 3, 4 組 2 9 名 (文型・標準クラス)

4 科 目 ・ 単 元

数学 A (数列)

5 単 元 について

(1) 教材観

学習指導要領を踏まえ、この単元について、単元の目標や内容に則して具体的に記述してください。

(2) 生徒観

この単元に関係する、これまでの既習事項やその定着の状況を、前単元までの評価、事前テスト、アンケートの結果などを分析し、その状況を具体的に記述してください。

(3) 指導観

生徒の学習状況を踏まえて、本単元で確実に基礎・基本を身に付けさせるため、学習展開や指導方法の工夫、評価の進め方、指導上の留意点などを具体的に記述してください。

6 単 元 の 目 標

学習指導要領に示された目標を踏まえて、本単元での到達目標を具体的に記述してください。

7 単元の評価規準

①関心・意欲・態度	②数学的な見方や考え方	③表現・処理	④知識・理解
・式の展開や因数分解などに関心を持ち、目的に応じて式の変形をしようとする。	・一つの文字に着目したり、一つの文字に置き換えたりするなどして、いろいろな式の見方をすることができる。	・式を用いて事象を適切に表現・処理することができる。	・乗法公式や展開公式の意味を理解している。

(教科によって、評価の観点は異なる場合があります。単元の目標と評価規準は表裏一体のものですから、単元の内容に則した具体的な評価規準を記入してください)

8 指導と評価の計画 (全 時間)

次	学習内容 (時数)	評 価					
		①	②	③	④	評 価 規 準	評 価 方 法

9 本時の展開

(1) 本時の目標

「6 単元の目標」を踏まえて、重点化した本時の具体的な目標を記述してください。

(2) 観点別評価規準

「7 単元の評価規準」をもとに、本時における評価規準を示してください。

(3) 準備物

(4) 学習の展開

△：指導内容、▲：学習活動	指導上の留意点	評価規準	評価方法
〈導入〉5分			
〈展開〉35分			
〈まとめ〉5分			

〔引用・参考文献〕

井川満他著(1998),『改訂版 高等学校 新編数学Ⅰ 教授資料』,数研出版

巻久他編(1994),『高等学校数学指導資料 数学Ⅰ』,みずうみ書房

文部省(1992),『高等学校数学指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫』,学校図書

文部省(1999),『高等学校学習指導要領解説 数学編 理科編』,実教出版

巻末資料4 研究協議の在り方を示した資料

効果的な研究協議会の在り方

平成17年1月11日

教 育 研 究 部

1 研究協議会を充実させる6つのポイント

(1) 「協議の視点」の明確化

研究協議の視点を全員に明確にしておきます。授業参観では、その視点に基づいて協議できるようにするために、研究協議の視点を踏まえて、参観してください。

(2) 授業者からの振り返り

授業者からの授業の振り返りや課題の提示は、具体的かつ明確にしてください。そして、授業者は、協議の視点に即して課題等を具体的に述べてください。

(3) 客観的な情報の必要性

ビデオによる記録、発問記録、板書記録等、授業についての客観的な記録をしてください。その際、参観者がそれぞれ分担して記録・分析するなどの工夫をしてください。

(4) 協議会への主体的、積極的な参加の必要性

研究協議会の参加者は事実に基づいた発言を行います。抽象的な発言に終始しては、効果がありません。また、参加者は協議を深めることにおいて同じ立場に立っていることを自覚し、積極的に発言するとともに、課題と思われる点について授業者や他の参加者に遠慮することなく発言してください。

(5) 司会者の役割の重要性

研究協議を深めるためには、司会者の役割が重要です。司会者は、問題点を整理し、協議の視点に沿って進行するよう工夫してください。指導・助言者を招聘した場合には、指導・助言の時間を適切に取ることができるよう時間の配分に留意してください。

(6) 改善計画の明確化

研究協議会のまとめでは、次の授業提案に向けての課題、改善すべき点等、研究授業の次のステップは何かを明確にし、確認してください。

平成15年度 第3回 研究授業ウィーク

広島県立神辺旭高等学校

教科	研究主題 ～ サブテーマ～	科目名 「単元」	日時	実施クラス	授業者	指導者
国語	基礎を徹底し、深く考える授業の創造 ～ 想像力を豊かにする指導方法の工夫～	古典Ⅱ 「大鏡」	2月23日(月) 第5校時	2年2,3,4組 4クラス展開 (習熟度別指導)		指導第二課
地理 ・ 歴史	学校目標(大学進学8割、国公立大学3割)の実現を目指す授業の創造 ～ 地理情報を分析・活用できる能力及び多角的な視点から国際社会を理解できる能力の育成～	地理A 「世界の人口と交流とわたしたち」	2月23日(月) 第7校時	2年3,4組 3クラス展開 (地理A選択生徒)		指導第二課
数学	主体的に考える力を育てる数学の授業を求めて ～ 数学的活動を活かす指導方法の工夫～	数学Ⅱ 「複素数と方程式」	2月23日(月) 第6校時	1年4,5,6組 4クラス展開 (習熟度別指導)		指導第二課
理科	主体的に考える力を育てる理科の授業を求めて ～ 演示実験の工夫～	化学Ⅱ 「電気分解」	2月23日(月) 第7校時	2年5組		指導第二課
保健 ・ 体育	自ら学ぶ意欲を高めるとともに、主体的に考える授業の創造 ～ 実践力の育成をめざした指導方法の工夫～	保健 「疾病予防活動」	2月24日(火) 第6校時	2年4組		スポーツ健康課
芸術	豊かな心を育む芸術の授業を求めて ～ 個性豊かな創造力の育成を目指した指導の工夫～	書道Ⅰ 「かなの学習」 (連綿)	2月23日(月) 第7校時	1年2,3組 3クラス展開 (書道選択生徒)		指導第二課
外国語 (英語)	主体的に考え、伝える力を育てる英語の授業を求めて ～ 言語活動による授業評価の工夫～	オーラル・コミュニケーション 「Health」	2月23日(月) 第5校時	1年6組 2クラス展開 (少人数指導)		指導第二課
家庭	基礎を徹底し、深く考える授業の創造 ～ 自ら調査し、課題解決を図る指導の工夫～	家庭一般 「食中毒の種類」 「住居の平面計画」	2月23日(月) 第6校時	2年1組 2クラス展開 (少人数指導)		指導第二課